

神奈川の中世城館（５）

中世研究プロジェクトチーム

はじめに

これまで「神奈川の中世城館」⁽¹⁾と題し、基礎データの集成⁽²⁾を行い、前回は堀に関する先行研究を概観した。今回はこれまでの集成をもとに考察を行うことを目的とする。最も多く集成できたデータである「上幅」は、後世の削平などの影響を強く受けている場合が多い。そこで、比較的影響が少なく、中世の状況を伺うことができると推測される「断面形態」、「傾斜角度」、「堀底形態と付属施設」についてまとめることにし、「規模」については適宜触れるようにする。そして、最後に中世前期と後期に分けて各考察を横断的に眺めることで、まとめとしたい。

発掘調査は様々な制約を伴うため、堀という大きな遺構はその一部しか検出されず、十分なデータを得られないことも多い。また、発見時のデータであるため、後世の削平や改変を受けた最後の状態であることが多く、単純比較はできないことも多い。検討対象となる遺跡もある程度広範に調査が行われ、成果が蓄積しているものに限られるため、県内全体の傾向として述べるのが難しい状況にある。しかし、先行研究で概観したとおり、発掘調査成果をもとにした横断的な考察は少ないといえ、今回の試みは今後の研究に寄与することができると考えられる。上記の問題点に注意しながら考察を進めることにしたい。（松葉）

1. 断面形態

堀の断面形に関しては、これまで「(2)」で小田原城について、「(3)」でその他の城館の例について、発掘調査により検出された堀について集成を行い、表に示した。

この集成において、堀の形態として使用した「薬研」「箱薬研」「箱」の語については、原則として報告書中に用いられている表記にしたがった。しかし、断面の形状の表現には各の報告書によって揺れがあることがわかった。同様の形状を示していても、違う語が用いられているケースは非常に多い。また「U字形」「皿形」「浅鉢形」といった表現を用いている場合もある。

当集成では、断面の形態は原則として報告書の表記にしたがったが、報告書で形態・形状が言葉で表現されていないものに関しては、当プロジェクトで判断し、おおむね断面形がV字を呈するものを「薬研」、逆台形を呈するものを「箱」、溝(堀)上部がV字状、下部が逆台形を呈するものを「箱薬研」として記載した。しかし、集成を試みる過程で、細部について統一的な定義を設けることはできなかった。したがって、たとえば薬研の形状を呈していても底部に若干の平場部分をもつものや、溝の上部が後世の削平を受けて遺存しないものは「箱」と記載した場合もある。また、中間的な断面形状を呈する遺構も多く見られる。このように溝の断面形を統一的な条件を設けて3形態に分類することは、かなり難しいことがわかった。

今回は、発掘調査の成果によって堀に囲まれる範囲が明らかになった城館を取り上げ、堀の断面形態を再点検してみる。

宮久保遺跡

綾瀬市所在。渋谷氏に関わる 12～14 世紀にかけての武士階層の居館とされる。中世の遺構は 12 世紀後半から 13 世紀中頃までと、13 世紀後半からの 2 時期を確認している。複数確認された掘立柱建物の周囲を屏や柵で方形に区画する。また、溝状遺構も検出されているが、いずれも排水を目的としたものとの見解が示されている。このうちほぼ南北 75m にわたって検出された S D 02 は、「上面幅 2～2.4m、底面幅 0.5～0.6m、深さ約 1m の箱薬研状」。東に流れる目久尻川にほぼ並行するかたちで設けられ、水路としても用いられたと考えられる。

この遺跡を「このタイプの屋敷は防禦系諸施設のあり方に限り開放性の高い空間を形成して」と論じる研究もある(橋口 2004)。そして、「中世前期の屋敷地を圍繞する「堀」をはじめとする施設は、“防禦機能”をもつとはいいい難いものであった。」とする。

堀が防御の目的で構築される前段階の例として、まず捉えておきたい。

大会原遺跡・六ノ域遺跡

平塚市所在。調査区南東に隣接した一帯は「杉浦屋敷跡」の名称をもつ遺跡で、後北条氏の家臣杉浦藤佐衛門の屋敷跡と伝えられるが、これは明治期に生まれた伝承である可能性が高い。ほかに中世にさかのぼる伝承はないが、1・2 区では、溝状遺構で圍繞される東西およそ 60m の空間が検出されている。周辺の調査事例から、さらに広範囲を幾条もの溝が囲むことが明らかとなっている。覆土から出土した遺物は同安窯系の青磁、渥美・常滑の甕、古瀬戸製品など。かわらけは 15 世紀の特徴を備えるものが中心となるが、中世前期から土地利用され、「溝で圍繞された中に、中世後期の生活空間が依存していた」とみられる。溝状遺構は「発見された溝状遺構は、その走行位置から(中略)北西範囲を幾重にも圍繞し、あたかも防御的な性格を思わせる」、「覆土や溝底の観察からは流水や湛水の痕跡はなく、C 12 a・b 号溝状遺構等は重畳する位置に幾度も掘り返しを行った形跡が認められた。」と報告される。また、区画の役割ももつが、溝の掘り返しは、壁が崩れやすく作り替えを余儀なくされた地質的な要因が考えられることも指摘されている。溝(堀)の規模や形態を考える場合、構築する技術や目的(防御・区画など)と同時に、地質的な要因が影響していることも考慮すべきであろう。

「(3)」の表中では C 9 号溝状遺構のような底部に平坦面をもつ形状を「箱」としたが、断面形は V 字形にちかく「薬研形」ともいえそうである。C 9 号溝状遺構からは 14 世紀後半～15 世紀前半・16 世紀後葉の遺物が出土している。

また、これらを検出した調査区の東に隣接する 8・33 区でも、南北に走行する中世前期の溝 3 条(C 1～3 号溝状遺構)を検出している(依田ほか 2009)。このうち C 2 号溝状遺構は越州窯系の青磁碗をはじめとして、渥美の甕、常滑の片口鉢 I 類など、古代末～中世の遺物が出土していることから、13 世紀に埋没したとも考えられる。この C 2 号溝状遺構は、溝底幅のやや広い溝を埋めて、V 字にちかい断面形を呈する溝が掘り直されているという時期差が認められる。切り合い関係から見て、C 3 号溝はこれよりも古い。

丸山城

伊勢原市所在。鎌倉時代初期の御家人糟屋有季の居城とされ、その後、関東管領扇谷上杉氏の居城となったという伝承がある。現在では、鎌倉時代から扇谷上杉氏による支配の時期を経て、後北条期に至る可能性

のある城郭と認識されている。ただし「丸山城」の名称の初見は近代になってからである。

成瀬第二地区遺跡群下糟屋D地区では形状の違う2条の堀を確認している。1号堀は「箱薬研」。2～4号堀は東西に走行する一連の堀であるが、場所によって規模・構造に差違があるため、便宜上分割して報告されている。この堀には底部に堀障子様の仕切をもつ部分がある。堀障子(障子堀)は後北条氏の城郭を特徴づけるとされているが、ここでの例は、覆土の火山灰から見て15世紀後半との見解もある(安藤 2006)。3号堀は堀障子をもたない部分で、「薬研状」と報告される。

下糟屋・丸山遺跡第6地点A地区で検出されたC1号堀は内外に犬走りをもち、内部に土橋状の掘り残しがある。「(3)」ではその形態を「箱」とした。またB地区で検出された堀は「箱薬研形」と報告される。この堀の上層・中層からは多量の瓦片が出土しているが、渥美産と思われる甕片、見込みに渦巻き状の明瞭なヨコナデ痕を残すかわらけなども混入している。この特徴を持つかわらけは扇谷上杉氏に関わる城館で出土する傾向が指摘されており、中世初期から15世紀の土地利用のなかでこの溝が構築されたと推測される。

玉縄城

鎌倉市所在。伊勢宗瑞(北条早雲)によって永正9年(1512)に築城され、天正18年(1590)北条氏勝が豊臣氏に開城、元和5年(1619)廃城。築城以前の土地利用をうかがわせる遺物が縄文土器片のみであり、16世紀初頭から17世紀初頭に営まれた可能性がかなり明確な遺跡といえる。

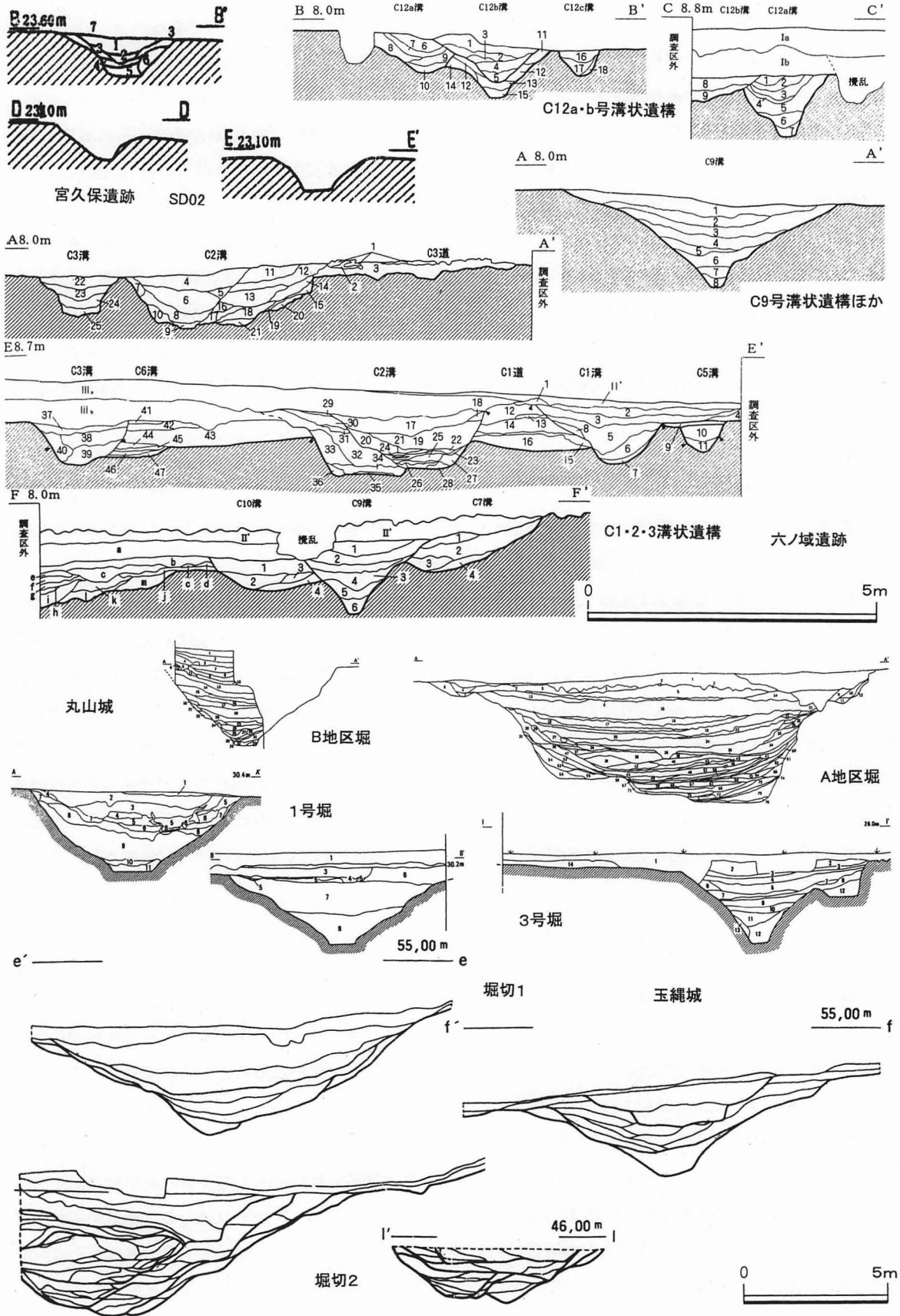
曲輪1・2を分断する堀切1は幅10.3m～14m、最深部で深さ4m。3時期が認められるとされ、初期が「浅い薬研形」、二期目・三期目が「皿形」と報告されている。諏訪壇と呼ばれる平場より北東に延びる尾根を分断する堀切2では6時期の掘り直し、「前半三期が薬研形であるのに対し、後半は箱形」と表現される。遺物は縄文時代のもので玉縄城存続期間のものは一点も無いと報告されている。したがって、これらの堀が築かれた年代および埋没した年代は、調査成果からは不明である。しかし、推定される玉縄城本丸の東に位置し、中世前期の土地利用の痕跡が認められないことから、玉縄城が営まれた時代のものであることはほぼ確実であろう。可能性として16世紀前半から17世紀初頭の間に堀が設けられ改変したということになる。この調査区の東側斜面で検出した9条の縦堀については、その断面形は「V字形」「皿形」と報告されている。

小括

従来、時代的に薬研形の溝が箱薬研形・箱形へと変化する理解とされてきた傾向があるが、見てきたように、個々の遺跡のなかでは箱形が薬研形に改変される例も認められる。また薬研形が中世後期には残らないとは言いきれない。しかし念頭においておきたいのは、はじめに述べたとおり、溝の形態を表す語彙に揺れがあることである。断面の形状がどのように表現されるかは報告者の判断に依るところが大きい。そして、遺構の遺存状態にも大きく影響されていると思われる。

居館の区画・排水を目的と主としたものから、防御を目的としたものに変容していくなかで、堀は当然大規模化する必要を生じる。年代的な隔たりもあり、立地条件や構築された目的も違うものを単純な比較で論じてはならないが、今回例に挙げた遺構の断面図を、試みに縮尺を1/100・1/200に統一して示してみた(第1図)。遺跡の伝承も参考に「古いものから新しいものへ」という一応の流れを踏まえ、溝の形態が比較的明瞭に観察できるものを選んだが、これを溝・堀の規模や形態の変遷ととらえてはならないと考える。

(菊川)



第1図 断面形態の例

2. 傾斜角度

県内の各城館

横浜市茅ヶ崎城では、これまでに 17 ヶ所で堀が確認されており、15 ヶ所で傾斜角度が判明している。西郭の南堀が内側 55°・外側 60°、北堀が内側 50°・外側 65°、6 T 内の東側が 60°・西側が 65°、北郭外周部の西堀と北堀が内側 70°・外側 60～70°を測るが、それ以外は 70～83°の傾斜を持ち、全体的に急角度に掘られている。堀の深さは 22 T・24 T・25 T 内、中郭中堀、平成 17 年度調査区 B・C 区が 3 m 以上、それ以外は 1.0～2.5 m を測る。堀の形態は、明らかとなっているものはいずれも箱堀である。

横須賀市奴田城では、S D01 が 55°、S D02 が 45°を測る。堀の形態は箱堀で、深さは 1.6～1.7 m である。

平塚市岡崎城関連では、御所ヶ谷遺跡で発見された 7 号溝の西側が 45°・東側が 60°、10 号溝が 50°を測る。堀の形態は箱堀で、深さは 0.7～1.4 m を測る。

同市片岡砦(城)は、1 T が 80°、2 T が 60°、S D01 が 55°で、1 T の堀のみ急斜面となっている。堀の形態はいずれも箱堀で、深さは 1 T・2 T が 1.2 m・1.1 m、S D01 が 0.9～2.2 m を測る。

同市真田城では、真田・北金目遺跡群の 10 区で 6 条、19 区で 2 条の堀が調査されている。傾斜角度は 10 区の S D003 が 40°、S D004 の南側が 40°・北側が 52°を測るが、それ以外の箇所は 60～75°とやや急な角度となっている。堀の形態は箱堀で、深さは 1.3～2.3 m である。

同市豊田館(豊田堀の内)は、S D46 の東側が 50°・西側が 60°を測る。堀の形態は箱堀で、深さは 1.0～1.4 m である。

同市堀ノ内館(藤間豊後守屋敷)は、S D01 が 50°、堀状遺構が 80°で、堀状遺構が急角度に掘られている。堀の形態は箱堀で、深さは S D01 が 1.1 m、堀状遺構が 1.0～2.3 m を測る。

同市吉沢館は、上吉沢市場地区遺跡群 1 号堀が 65°、高林寺遺跡第 7・9・12 地点の S D01 が 40～80°と S D01 は途中で角度が変わっている。堀の形態は箱堀で、深さは 1 号堀が 1.5 m、S D01 が 1.0～1.6 m を測る。

同市杉浦屋敷は、六ノ城遺跡において 6 条の溝が検出されている。傾斜角度は C 8 号溝が 40°、C 21 号溝の東側が 40°・西側が 35°、C 9・C 11・18・C 14・C 17 号溝は 45～60°である。堀の形態は箱堀で、深さは C 8 号・C 14 号・C 21 号溝が 1 m 以下、それ以外が 1.2～1.4 m を測る。

鎌倉市杉本寺周辺遺跡群は、堀 1 の東側が 40°・西側が 45°を測る。堀の形態は薬研堀⁽³⁾で、深さは 1.3 m である。

同市玉縄城は、堀切 4 条、堅堀 9 条が確認されている。堀切の傾斜角度は堀切 1・2 と西側堀切が 30～50°であるが、東側堀切は内が 35～75°・外が 50～75°と途中で角度が変わっている。堅堀の傾斜は 20～40 度とやや緩やかな造りである。深さは 1.5～10.8 m を測るが、8 m 以上がやや多く認められる。堀の形態は箱堀と薬研堀である。

藤沢市大庭城は、西部 211 地点遺跡の S D01 が 80°、S D07 の南側が 40°・北側が 65°を測り、S D01 は垂直に近い角度で掘られている。堀の形態は箱堀で、深さは 2.3～2.4 m である。

茅ヶ崎市近藤右衛門尉経秀居館は、上ノ町遺跡で発見された 49・80・87 号溝の東側が 40～60°・西側が 50～60°、1・17 号溝の東側が 60°・西側が 40°と溝の東側と西側が違う角度で掘られている。深さは最

大で1.4m、堀の形態は箱堀である。

相模原市津久井城は、御屋敷、城坂曲輪群、馬込地区の3ヶ所で堀が確認されている。傾斜角度は、御屋敷1号堀が75°、2号堀の北側が75°・南側が50～80°、城坂曲輪群は1号堅堀が39～87°、馬込地区空堀が北側33°・南側22°を測る。御屋敷2号堀、城坂曲輪群1号堅堀4は途中で角度が変わっており、馬込地区の空堀は両者よりも緩やかな傾斜となっている。堀の形態は、城坂曲輪群1号堅堀の一部が薬研堀状を呈するが、箱堀が主体である。深さは御屋敷1号堀が2.5m、2号堀が1.3m、城坂曲輪群堅堀が1.1～3.1m、馬込地区空堀が最深部で5.1mを測る。

大和市深見城は、22ヶ所で堀が確認されている。郭Ⅰの外堀と内堀、郭Ⅱの外堀と内堀、郭Ⅲの外堀と内堀、本郭の内堀、主郭の内堀、外外郭外堀、天竺坂堀、内側堀等である。傾斜角度は、郭Ⅰ外堀が内側85度・外側80°、内堀が内側75°・外側70°、郭Ⅱ外堀が85°、内堀が内側75°・外側70°、郭Ⅲ外堀が50～70°、内堀が内側45～75°・外側75°、本郭内堀85°、主郭西内堀80°、主郭中央内堀の内側75°・外側70°、外外郭外堀60～85°、外外郭中央外堀の内側75°・外側70°、天竺坂堀40～50°、内側堀の内側80°・外側70°を測る。内側と外側の角度の違いが目立ち、天竺坂堀以外は70°以上の比較的急な角度を有している。堀の形態は、天竺坂堀のみ薬研堀、それ以外は箱堀である。深さは2.0～2.6mが主体であるが、主郭の内堀が5.5m、天竺坂堀が8.3m、内側堀が7.2mを測る。

伊勢原市丸山城関連の堀または溝は、8遺跡で検出されている。傾斜角度は、上粕屋・小山遺跡の溝(3条)が40～70°、成瀬第二地区遺跡群の堀(3条)が30～60°、成瀬第二地区遺跡群下槽屋C地区第一地点の堀(1条)が40～60°、成瀬第二地区遺跡群下槽屋D地区の堀(4条)が34～75°、丸山遺跡第Ⅳ地点の堀(1条)が65°、丸山遺跡第5地点の堀(1条)が40～45°、上粕屋・メ引北遺跡の堀(1条)が44～49°、下槽屋・丸山遺跡(第6地点)の堀(2条)が15～65°を測る。角度は40～60°で、内側と外側または北側と南側の角度が違っている例がやや多く認められる。堀の形態は、成瀬第二地区遺跡群の堀が薬研堀、その他は箱堀が主体である。深さは1.1～9.8mと様々である。

同市岡崎城は、御殿の堀と二ノ郭の堀が確認されている。傾斜角度は御殿の堀が50～75°、二ノ郭の堀が50～90°を測る。御殿の空堀と第1グリッドの堀は途中で角度が変わっている。90°を測るのはSD-4の外側で、内側とは30°の差がある。肩または片側法面のみを検出した例が多く、堀の形態は不明である。深さは御殿の堀が3.5m、二ノ郭の堀が1.9mを測る。

南足柄市浜居場城は、トレンチ8箇所空堀が確認されている。4号トレンチでは主郭と西櫓台の間の堀、8号トレンチでは主郭と北櫓台の間の堀、3号トレンチでは西櫓台と西側平場の間の堀である。傾斜角度は、主郭と西櫓台の間の堀が東側45°・西側10°、主郭と北櫓台の間の堀が北側10°・南側27°、西櫓台と西側平場の間の堀が東側37°・西側15°を測る。いずれも東側と西側または北側と南側の角度が違っており、最大で30°の差があるが、比較的緩やかな角度で掘られている。堀の形態は薬研堀で、深さは1.0～3.95mを測る。同市沼田城は、4箇所北大空堀と空堀(A・B)が確認されている。傾斜角度は、北大空堀の1号トレンチが10～40°、2号トレンチが40～60°、空堀Aが40～55°、空堀Bが20～80°を測る。北大空堀の1号トレンチは比較的緩やかな傾斜、空堀Bは急な傾斜となっているが、いずれも途中で角度が変わっている。堀の形態は箱堀で、深さは1.0m前後を測る。

綾瀬市早川城は、17ヶ所で堀切が確認されている。いずれも内側と外側の角度が違っており、途中で角度が変わっている箇所もやや多く認められる。傾斜角度は40～60°が主体で、内外の角度差はそれほど大きく

ないが、Ⅱ－５Ｔの内側 70° ・外側 25° 、Ⅴ－９Ｔの内側 25° ・外側 $40\sim70^{\circ}$ のように差が大きい箇所もある。堀の形態は、ⅠＢ－１Ｔ・３Ｔ、Ⅳ－６Ｔが箱薬研、それ以外は箱堀である。深さは $0.3\sim6.7\text{m}$ と一定していない。

松田町松田城は、空堀、堀切、堅堀が確認されている。傾斜角度は空堀が北側 55° ・南側 60° 、堀切が北側 45° ・南側 50° 、堅堀が 60° を測り、北側と南側に若干の角度差が認められる。堀の形態は、いずれも箱堀で、深さは空堀が $1.6\sim2.6\text{m}$ 、堀切が $6\sim8\text{m}$ 、堅堀が $0.1\sim1.5\text{m}$ を測る。

山北町河村城は、空堀７条、堀切２条、堅堀１条が確認されている。空堀は $20\sim70^{\circ}$ 、堀切は $40\sim70^{\circ}$ 、堅堀は $20\sim50^{\circ}$ を測り、それぞれ東側と西側または北側と南側に若干の角度差が認められる。また、途中で角度が変わる例が多い。 70° の傾斜を持つのは堀切３の西側と空堀２の西側で、深さは 8m を測る。堀の形態は、堀切３のみ薬研堀、それ以外は箱堀である。深さは $2.5\sim12\text{m}$ と幅があるが、 $5\sim8\text{m}$ が主体である。

小田原市では小田原城関連の堀や溝が多地点で確認されており、資料が蓄積されつつある。主な堀の傾斜角度は、総構堀が $36\sim63^{\circ}$ 、二の丸住吉堀が $60\sim70^{\circ}$ 、鍛冶曲輪北堀が $25\sim70^{\circ}$ 、三の丸外郭の新堀が $30\sim70^{\circ}$ 、三の丸北堀が $45\sim70^{\circ}$ 、三の丸南堀が $30\sim55^{\circ}$ 、三の丸東堀が $15\sim60^{\circ}$ 、三の丸元蔵堀が $40\sim65^{\circ}$ 、三の丸山本内蔵邸跡第Ⅺ地点箱根口跡第Ⅱ地点１～３号堀が $30\sim60^{\circ}$ 、御長屋跡第Ⅰ～Ⅲ地点１号堀が $40\sim70^{\circ}$ 、本町遺跡第Ⅲ地点１号堀が $45\sim65^{\circ}$ 、小峯御鐘ノ台大堀切東堀が $45\sim50^{\circ}$ 、小峯御鐘ノ台大堀切西堀が 40° 、八幡山堀切が $30\sim40^{\circ}$ 、八幡山古郭南曲輪東堀が $20\sim68^{\circ}$ 、八幡山古郭藤原平南入堀が $50\sim60^{\circ}$ となっている。

小括

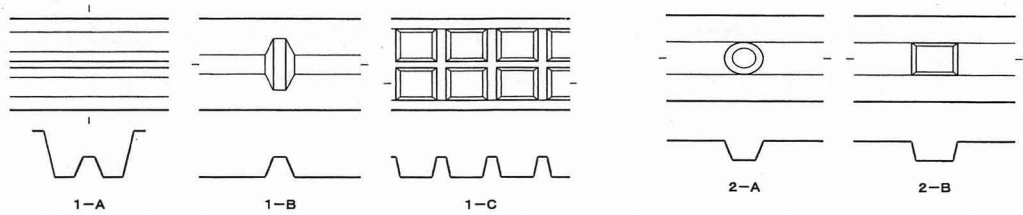
以上のように、神奈川県内の城館の堀の傾斜角度は、構築時期や地域に関係なく $40\sim60^{\circ}$ の範囲に収まる例が多い。 $70\sim80^{\circ}$ の急な角度を持つ堀が主体を占めている城館は茅ヶ崎城と深見城のみである。逆に 40° 以下の緩やかな傾斜を有する堀が主体を占めているのは玉縄城と浜居場城でこちらもあまり認められない。 70° 以上の角度を持つ堀は津久井城、丸山城、岡崎城、早川城などでも検出されているが、津久井城や丸山城では 40° 以下の堀も確認されている。このように同じ城館でも構築場所によって傾斜角度が大きく異なる堀が存在する事例も認められる。傾斜角度は内側と外側で異なっている例が多いが、 $5\sim10^{\circ}$ が主体で、大きく異なる例は少ない。途中で角度が変わる事例は、丸山城、沼田城、川村城などで複数確認されている他、その他の城館でも１～数例認められる。角度差は $10\sim40^{\circ}$ で、 20° 前後が多い。（木村）

３．堀底形態及び付属施設

県内で発掘調査が実施された城館で小田原市内では小田原城関係で９７ヶ所、小田原市以外で４７遺跡１２６ヶ所の発掘調査報告書から、堀の規模と堀底形態及び付属施設などの集成を行った。

堀底形態

集成に際して堀底の形状は、１類と２類の大分類、さらに堀底の状況によりＡ類～Ｃ類の小分類を行った。区分については以下のとおりである。



第1類：障壁(堀障子)を有するもの。

A類：堀の方向に沿って平行に障壁が作られているもの。

B類：障壁が堀の方向に直行し、単独ないし1列で連続するもの。

C類：障壁が堀の方向に直行し、2列以上連続するもの。

第2類：堅穴(落とし穴)を有するもの

A類：平面形が円形を呈する。

B類：平面形が方形を呈する。

第2図 堀底形状分類模式図

分類の結果、発掘調査報告書より堀底の形状があきらかとなった遺跡は、以下の通りである。

小田原城関係では八幡山古郭、二の丸住吉堀、三の丸箱根口・南堀・東堀・新堀をはじめとする各地点、竜洞院第Ⅰ地点、伝肇西第Ⅰ地点等の総構えの各地点など36ヶ所で確認できた。確認された形状は、堀障子が単独ないし1列で連続する1-B類が32箇所とほとんどである。その他、1-A類は山本内蔵邸跡第Ⅳ地点の1ヶ所、1-C類は二の丸住吉堀、三の丸東堀第Ⅲ地点、三の丸元蔵堀第Ⅴ・Ⅵ地点の3ヶ所でそれぞれ確認されている。三の丸新堀では、上幅8.5m、堀底幅2.9m、深さ5m以上、法面角度55~70°を測る堀が確認されており、堀底に高さ1.12m、上端幅1.7m、基底部の幅2.9mの規模の障壁があり、上面には幅0.6m、深さ0.3mの溝が切られている。伝肇西第Ⅰ地点では、上幅16.5m、堀底幅6.5m、深さ10m、法面角度57~63°を測る堀が確認されており、堀底に高さ1.2~1.7m、上端幅0.5~1.0m、基底部の幅2.4mの規模の障壁があり、上面には幅0.35mの溝が切られている。堀障子の上面に掘られている溝は、片方の堀障子でオーバーフローした水を流し、水位を一定にするためと考えられており、堀障子が水堀として機能していたことが指摘されている。二の丸住吉堀は、堀底に2列の堀障子が確認されているが、上層を17世紀以降の大久保期の薬研堀に削平され、一部は銅門の南側の石垣の下に潜り込んでおり詳細な規模は不明であるが、東西方向に3.4~4.8m、堀底幅2.6~3.8m、深さ1.0~1.4m、法面角度60~70°で堀障子が確認されている。

小田原市以外では横浜市の茅ヶ崎城、鎌倉市の玉縄城、大和市の深見城、伊勢原市の丸山城、山北町の河村城、平塚市の真田城の6城で堀底の形態が確認されている。形状は小田原城と同様に大部分が1-B類であるが、真田城のみは堀底に堅穴状遺構を有する2-A類である。茅ヶ崎城は、扇谷上杉氏の拠点と考えられ、14世紀末~15世紀代に使用されたと考えられる。上幅2.3~5.8m、堀底幅1.1~3.9m、深さ1.0~4.5m、法面角度50~80°の堀障子が確認されている。玉縄城は、小田原の伊勢宗瑞(北条早雲)により、相模国に勢力を張る三浦氏の攻略のために築城された城で、上幅9.0~20.0m、堀底幅1.3~2.0m、深さ3.5~10.8m、法面角度34~70°を測る堀が確認されている。深見城は、15世紀中頃に実在した「山田伊賀守入道經光」の居城であることが『新編相模国風土記稿』に記されているのみで詳細は不明である。上幅4.0~7.0m、堀底幅1.5~2.7m、深さ1.3~2.2m、法面角度30~50°を測る堀が確認されている。丸山城は、鎌倉時代初期の糟屋左衛門尉有季の居城とされているものである。上幅4.1~17.0m、堀底幅0.4~10.0m、深さ1.1~9.8m、法面角度30~70°を測る堀が確認されている。河村城は、小田原北条氏の甲斐国武田氏に対しての支城として存在した城で、平成元年度より詳細分布調査やトレンチ調査が実施された。調査では、堀切、

空堀、土橋、橋脚遺構、竪穴状遺構群、地業面等の遺構が調査され、古絵図に記載のない空堀も確認されている。上幅 6.0～約 25m、堀底幅 0.5～16.6m、深さ 3.0～12.0m、法面角度 40～70° を測る堀が確認されている。

付属施設

付属施設として、土塁と土橋の存在を確認した。土塁は、小田原城関係では住吉堀、三の丸南堀・東堀・外堀、元蔵堀、八幡山古郭八幡堀枝堀、北条幻庵居館跡、小峰御鐘ノ台大堀切東堀、伝肇西第Ⅰ地点等の 15ヶ所で確認されている。小田原以外では、茅ヶ崎城、玉縄城、大庭城、津久井城、深見城、丸山城、沼田城、早川城の 8ヶ所で確認されている。土橋は小田原城関係では住吉堀、八幡山古郭本曲輪、小峰御鐘ノ台大堀切東堀の 3ヶ所で確認されている。小田原以外では、茅ヶ崎城、真田城、玉縄城、深見城、丸山城、松田城、河村城の 8ヶ所で確認されている。

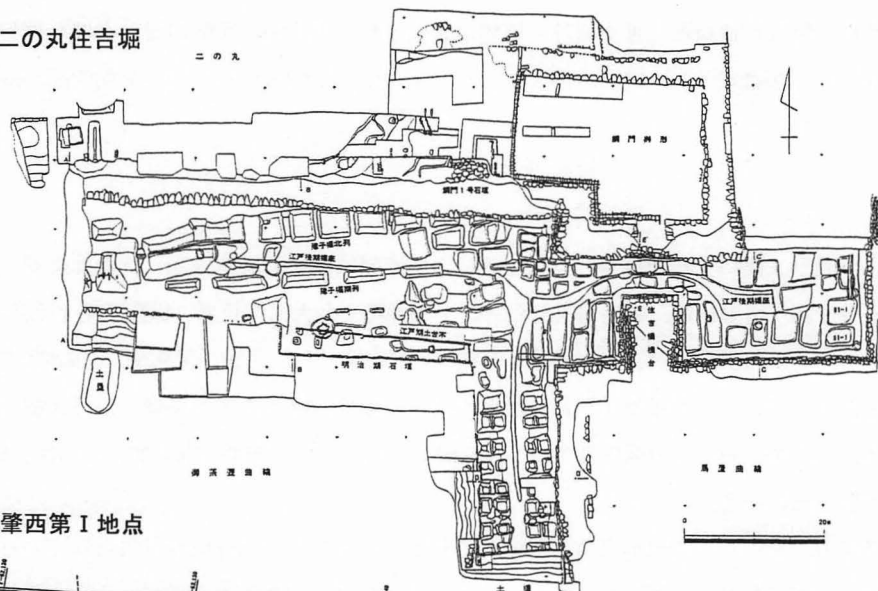
土塁や土橋は、後世の削平のために土橋自体が消滅してしまったものや、調査地点が限られているために調査で確認されないものが多数あり、本来ならばもっと多くが存在していたと考えられる。

次に、堀障子が確認された各遺跡を出土遺物から見てみたい。小田原城の各遺跡からは、青磁・白磁・染付等の中国舶載遺物、瀬戸窯・常滑窯等の国産陶器、かわらけ等、時期的に 15 世紀後半～16 世紀の遺物が出土している。小田原以外では、茅ヶ崎城では、青磁碗などの舶載磁器、常滑甕・瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、見込に渦巻文を持つかわらけ等が出土している。玉縄城では、青磁・白磁・明染付等の舶載磁器、瀬戸灰釉皿・播鉢等の国産陶器、かわらけ等が出土している。深見城では、青磁碗等の舶載磁器、瀬戸縁釉皿・常滑窯甕等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ等が出土している。丸山城では、龍泉窯及び同安窯系の青磁碗、古瀬戸壺・常滑窯甕・片口鉢・渥美窯甕等の国産陶器、瓦質火鉢、かわらけ等が出土している。河村城は戦国期の染付・青磁・白磁等の舶載磁器、常滑窯甕・古瀬戸梅瓶などの国産陶器、かわらけ等が出土している。遺物の時期としては、丸山城から 11 世紀後半代と 13 世紀前半代のやや古い時期の遺物が出土しているが、他は 14 世紀後半～16 世紀後半までの時期に比定される遺物がほとんどである。

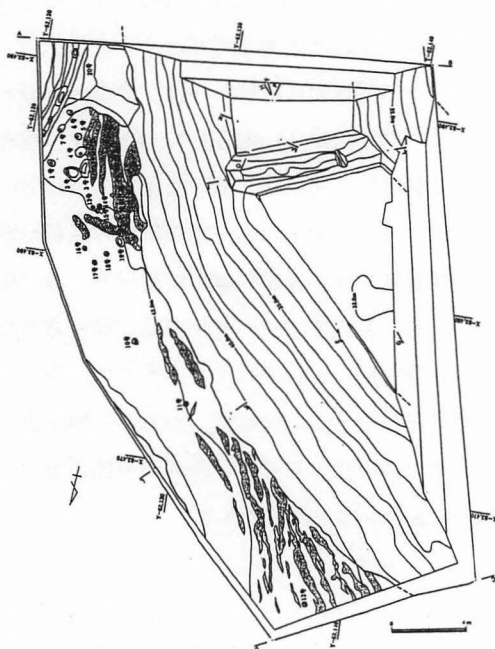
小括

以上、堀底形態と付属施設の確認できたものについてみてきたが、県内で確認されている城館の堀として報告されている数から言えば、限られた条件での調査にならざるを得ず、堀底形態がすべて明らかになってはいない。出土遺物からみると、14 世紀後半～16 世紀後半がほとんどであり、後北条氏の勢力の伸張に伴い県内の城郭にも堀障子が浸透していったものと考えられる。その中で、三の丸新堀は、朝倉右京進の證文写（神奈川県史資料編 3 九二六八）から天正 15 年（1587）6 月以前には成立していることが指摘され、出土遺物のみならず古文書からも存在が確認できる。また、佐々木氏は小田原城で確認されている堀障子は、「堀の法面には工具痕残るものもあり、法面は直線的に仕上げられており、コーナーなどの稜線は筋が真っ直ぐに通っている。また、法面から底面への角度も鋭角で、神経質とも言える程の直線となっており、堀法面のコンタ図を作成しても、ほぼ等間隔で直線が引かれる」と述べており後北条期の堀の特長だと指摘されている（佐々木 2010）。堀底の形態や付属施設等については、小田原城関係では資料が多く蓄積され堀の状況が解明されつつあるが、小田原城以外では周辺の宅地化や公園化等により発掘調査自体が少なく状況の解明が少ない。今後の調査による資料の蓄積により状況の解明が進むことに期待したい。（宮坂）

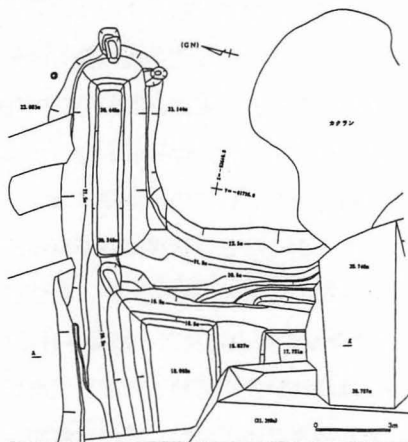
二の丸住吉堀



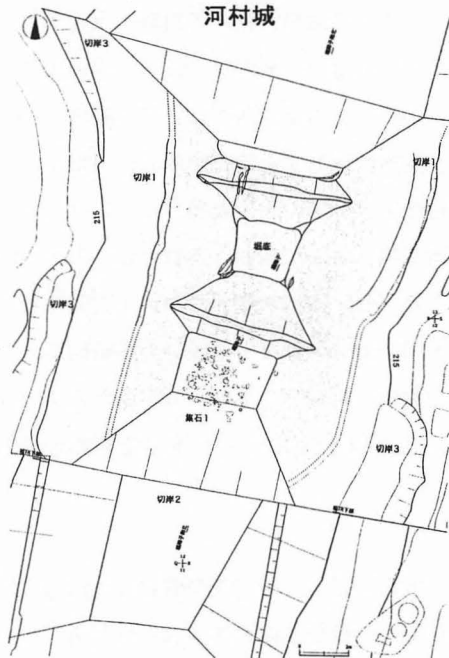
伝肇西第Ⅰ地点



三の丸新堀第Ⅳ地点



河村城



第3図 各城館の堀底形態

まとめ

中世前期

東国では、防御系圍繞施設をもつ「方形館」は基本的に中世後期になってからであり（橋口 1987 など）、県内もその大きな流れのなかで語ることができる。中世前期に帰属して明確に堀と呼べそうなものは非常に少ない。ここでは堀や大溝と呼ばれるもの、それに類すると推測される溝を取り上げておきたい。

鎌倉では鎌倉時代初期に位置付けられる 2 例を確認しておきたい。大倉幕府跡では幕府東限の施設と推測される堀（遺構 91）が検出された（熊谷 2011）。上幅約 5.1m、深さ約 2.6m を測り、底部幅 30～40 cm 程度と考えられている。断面形は薬研で、傾斜角度は 40° である。杉本寺周辺遺跡でも同時期と推測される堀（堀 1）が確認されている。これまでに指摘されているとおり、この時期の堀は断面形が薬研を呈していることが多く、この 2 例もそれにあたる。傾斜角度は両法面とも 40° 程度で、これも 2 例酷似しており、注目に値する。規模に関しては幅、深さとも大きく異なるが、これが敷設された場所によるものなのか、後世の削平の影響なのか判然としない。土塁などの付属施設は確認されていないが、大倉幕府跡の調査は狭小であるため、不明な部分も残る。ほかより明らかに規模の大きいこれらの溝は、区画以外の機能も有していたと考えられ、防御性も無視できないと指摘されることが多い。しかし、鎌倉時代中期以降、このような大溝は見られなくなり、大路の側溝など形態も変化する。これには社会変化の影響との指摘もある（岡 2006）。

鎌倉以外では、宮久保遺跡で区画溝（S D02）が発見されている。溝は箱薬研形で、溝上部の傾斜角度が 20～30°、下部が 60～70° となっている。法面に傾斜角度の変化が見られない場合は 40～50° となる。付属施設などはみられない。この溝は堀と指摘されていないが、野生動物との攻防（中澤 2006）という視点を加えるならば、今後の評価も変わるかもしれない。大会原遺跡・六ノ城遺跡では区画以外に防御性も推測される溝が発見されている。C 1～3 号溝状遺構の規模は最大で上幅 3.5m、深さ 1.2m である。この 3 遺跡では、規模がほかの溝より大きいということでは同じだが、それ以外に共通性はない。また、断面形態にも差異が見られる。つまり、遺跡内で規模や形態は完結しており、地域の共通性はないように推測される。

県内ではこの時期の堀は非常に少ない。例として見てきた溝は、規模がほかの溝よりやや大きく、区画や排水以外の機能も示唆されている。形態は様々あるが、大局的に見ると薬研形が多いようである。傾斜角度については 40～50° が多く、両法面はほぼ同じ角度が多い。しかし、前述のとおり、これは中世後期以降にも当てはまることなので、時間的な特徴とするには更なる精査が必要である。堀底形態については、障壁などは確認されず、中世前期にはそのようなものは基本的になかったと推測される。付属施設についてもこれまで確認されていないが、後世の削平の可能性も考慮しなければならない。

中世後期

中世後期になると、軍事的な緊張が多くなるなか、堀や土塁で圍繞された方形居館、戦時の拠点となる城郭が発達する。ここでは居館と城郭にわけて見てみることにする。

調査で方形居館と分かった 2 遺跡を見てみたい。表の屋敷遺跡では三方を堀（K 1 号大溝）で、一方を開析谷で囲まれた方形居館が発見されている（近野ほか 1997）。上面は削平が激しい部分もあり、残存のよい箇所では上幅約 4.8m、深さ 2.4m を測る。形態は薬研形と箱形の両方が確認でき、薬研形から箱形への変遷が推測されている。傾斜角度は薬研形で 40～50°、箱形で 60° 前後を測る。薬研形の堀底には一段掘り込まれた

溝を確認できる箇所もある。土橋を有し、直接は確認されていないものの、覆土の状況から内側には土塁が構築されていたと推測されている。上ノ町遺跡では主郭と副郭を囲む大溝(K1号溝、K17号溝)が確認されている。規模などは「(3)」のとおりであり、K17号溝には柵列を伴い、防御性が指摘される(富永2009)。形態は箱形が主であるが、薬研形も見られる。両遺跡に見られる堀(大溝)の特徴のうち、共通点を挙げておきたい。上幅が4mを越えるなどほかの溝と比べて大きいといえる。形態は薬研形と箱形の両方が確認でき、薬研形が先行するものの、同時期の利用も考えられる。この両形態が併存することは注目に値しよう。堀底には、薬研形で一段掘り込まれた溝が見られるが、箱形では特に見られない。また、土塁・土橋・柵列など施設は異なるが、堀に伴う遺構が確認されている。

前述のように後北条期の堀は、傾斜角度が急であると指摘されている(佐々木2010)。集成に当てはめると、60~70°に相当すると考えられ、一部、80°近いものも見られる。まず小田原城の堀について、傾斜角度が急で、規模や形態が明らかなものを中心に見てみたい。堀の形態については、箱堀が主体で、薬研堀が僅かに確認できる。規模は様々だが、上幅4m以上、深さ2m以上あるものがほとんどで、上幅10m以上、深さ5m以上も見られる。堀底形態が確認できるものは、障壁を有する1-Bである。土塁や土橋などの付属施設は確認できなかったが、中世段階では不明な部分も多い。このような堀は小田原城の一面に集中しているというわけではなく、比較的全体的に確認できるが、今後の調査事例の増加で変わる可能性も十分ある。

後北条氏に関わる城郭は県内にも多い。玉縄城・津久井城・河村城・丸山城などが著名であるが、これらの城郭から発見された堀は、小田原城の堀ほど傾斜角度が急ではなく、40~60°が多い。これが支城の特徴であるのか、後世の改変の影響なのか判断はできなかった。規模で見ると、上幅10m以上、深さ5m以上の堀も見られ、小田原城と比しても見劣りはしない。また、確認された堀底形態は何れも1-Bであることは注目に値し、地山を掘り残して構築している。これらの城郭からは堅堀も確認されている。形態は薬研形・箱形両方見られる。傾斜角度は30~40°と比較的緩やかだが、規模は上幅10m以上と大きいものが多い。堅堀はその性格上、配置と規模が重要であり、法面の角度はこの角度で十分であったのだろう。他方、津久井城は小さな堀を接続させる構造で、他とは大きく異なる。検出例が増えてからこの意味は考えなければならない。

以上、中世を前期と後期に分けて考察してきた。断面形態に関しては前期・後期とも薬研形・箱形ともに見られるが、堀障子などの堀底形態は中世後期以降でなければ見られず、城郭と称される遺跡でなければ見られない。前期は堀と呼べそうなものが少なく、規模も小さい。それに比べ後期は大きい傾向はある。また、方形居館より城郭の方がより大きい堀が多い。これが機能差によるものなのか今後も議論が必要である。今後は城館内での位置により、規模や形態に差が見られるのかという点について検討する必要があるだろうが、検討資料の追加を待ち、再検討したい。(松葉)

註

- (1) 本プロジェクトで行ってきた「神奈川の中世城館(1)~(4)」については、以下「(1)~(4)」と省略する。また、各用語の定義などはこれまでの報告に準じている。
- (2) 基礎データ集成で使用した報告書の出典については「(1)~(3)」を参照頂きたい。なお、集成後に刊行された報告書や遺漏分については適宜触れていく。また「(4)」で掲載した文献については紙幅の都合上省略する。前出を参照願いたい。
- (3) 「(3)」では断面形態を「箱」と記載していたが、「薬研」の誤りである。ここで訂正しておく。

引用・参考文献

- 安藤洋一 2006「伊勢原の城館—丸山城跡を中心として—」『神奈川の城館跡』神奈川考古学会
 近野正幸・恩田勇・谷口肇 1997『宮ヶ瀬遺跡群XIII』かながわ考古学財団調査報告19
 依田亮一ほか 2009『湘南新道関連遺跡II』かながわ考古学財団調査報告242